農 村 と 工 業

—1979 年度秋季学術大会シンポジウム—

オーガナイザー：村田喜代治*・浮田典良**・伊藤喜栄***・中藤康俊****

趣 旨

冒頭にオーガナイザーを代表して伊藤喜栄(慶応大)が、問題提起を兼ねて趣旨説明を行なった。

従来、地理学では個別産業部門の研究が数多く行なわれてきたが、それらの積上げのみによっては「地域」は把握されえない。「地域」の実態は個別産業相互の依存、あるいは対立・競合であり、この側面にメスを入れる必要がある。本シンポジウムはこうした問題意識のもとに次の諸点を明らかにすることにより、地域論をさらに展開しようと試みるものである。

1. 農村の工業化の諸類型とその地域的多様性について明らかにする。一般に農村の工業化としては、農産物加工、伝統産業、および大都市から農村に進出した近代工業の三つがあらうが、いかなる工業がいかなる地域で展開したか、その要因と展開の仕方はいかなるものか。

2. 農村において工業が展開する条件として、これまで産地の諸条件は明らかにされたが、市場あるいは流通機構、流通資本の性格の違いは必ずしも十分検討されているとはいえない。これらの諸条件の違いが産地の多様性とどうかかわりあっているか。

3. 工業化は農業生産構造の違いとどう関係するのか、工業化は農業生産にいかなる影響を及ぼしているか。

4. 工業化が農村の村落構造とどうかかわりあっているのか、工業化が村落構造をいかに変えるか。

5. 戦前から戦後を通じて工業化政策はどのように変質し、農村の工業化にいかなる役割を果たしたか。

等々である。

なお、座長ならびに総合討論の司会は村田喜代治(中央大)、浮田典良(京都大)が行なった。

* 中央大学・経済学部 ** 京都大学・教養部

*** 慶応大学・経済学部 **** 金沢大学・法文学部

研究報告

北村嘉行(東洋大)：農村工業の全国分布とその類型 農村工業とは、農業資本またはそれが産業資本化したものを基盤とし、農村でとれる原料を用い、農村の技術により、農村の余剰労働力をもって農村に生産構造を展開させる工業であるが、これを原料の面からみるならば、1次産品を1次加工するものが典型といえる。北海道・兵庫・鹿児島には農産加工が、青森・宮城・静岡には水産加工が、山形・長野・愛媛には青果物加工が多いなど、農林水産業の発達にみあった特定県に農村工業の分布が多くみられる。繊維工業、地場産業の一部にも農村工業と目されるものが含まれているが、これらを加えるならば、その分布は全国的であり、内容も多彩である。農村工業を類型化するならば、Ⅰ. 農産品を原料としてその付加価値生産性を高めるもの、Ⅱ. Ⅰとして発生したが、今日は原料基盤を失ったもの、Ⅲ. Ⅱからその労働力を基盤として、さらに製品・業種転換したもの、Ⅳ. 新たな農業構造の変化により、余剰化した農村労働力を求めて新規立地するもの、に区分される。

青柳光太郎(東北大)：横手盆地の漬物工業

東北の工業化には、大都市地域からの工業の導入と、農産物加工業育成が考えられるが、農村工業としては後者が好ましい。その振興に当たっては農民自らがよい技術を身につけ、発展させること、また自らの手で販売経路を開拓することが重要である。横手盆地平鹿町の浅澤婦人漬物研究会はこうした農村工業の好例であるが、その成功は農家婦人に現金収入の途が開かれ、買上げ価格・納入時期などの面で自町内農家に優遇措置をとることにより、廃棄農産物が換金されるなど、減反政策への対策の一つともなり、地域農業の振興に寄与するところが大きい。この意味からもその規模の拡大が今後の課題として

重要である。

日下部高明(足利高)：農家と賃機とのかかわり合い——国内向け足利織物の場合——

足利織物の国内向け生産は、その多くを足利市街地周辺農家の賃仕事に依存しているが、農村と織物業のかかわりは古く近世にはじまる。地主の兼ねる元機が、小作人を賃機や番頭に利用、積極的に組織化して産地を形成した。その後明治末期、足踏・力織機の導入とともに産地の再編成が行なわれ、少数の企業力・技術力のある元機、新興の元機のもとに足踏機を購入した少数の農家が新しい賃機層として統合された。これらの賃機はおおむね自小作・小作であるが、銘仙・綿紗等新製品による産地としての発展とともに、次第に専業賃機も出現するようになる。戦後の変革は昭和30年代の着尺織物の消滅、ナイロンスカーフ用織物のブームによりもたらされる。とくに昭和40年代に農協資金、融資制度を利用しての賃機農家が激増し、ほとんど村をあけての織布兼業という状況が現出した。

松田松男(小田原城内高)：農山村における季節の出稼ぎ労働者の位置づけ及び供給過程について——新潟県松代町千年集落を中心に——

本研究は農家の諸兼業形態の中では最も不安定な就業形態である農民出稼ぎを、農山村内部の社会機構の中でいかなる過程を経て析出されていくのか、という視点から考察したものである。千年集落においては出稼ぎは1964年をピークとして漸減しているが、首都圏を中心として中高年齢層の土建・工場出稼ぎ者が少なくない。これらは従来縁故による個別的募集方式によっており、それにまつわる家父長的、地縁的雇用関係もみられたが、1963年「出稼ぎ組合」が設立され、町行政の積極的介入による「集団的募集方式」が一般化した。けれども、それは必ずしも労働者供給事業における労働ボス制度の解体を意味するものではなく、むしろそれを「近代的」に再編、利用することによって、労働者の労働市場への流出をより効率化するものにほかならなかった。

村上 誠(広島大)：工場進出による農村の変貌——中国山間農村の場合——

中国地方、特に広島県の山間農村について、①工場の農村への進出の実態と、②工場の進出による

農業と農村の変貌のメカニズムを考察する。この場合、農山村に立地するのはおもに東洋工業の部品加工の分工場である。その動きは、東洋工業が乗用車メーカーとして増産体制を確立する昭和40年代以降であり、その後半に広く山間部に展開した。広島市近傍での地価高騰・公害・労働力補充の困難が分散の要因である。一般に軽量、小型で技術レベルの相対的に低い機械・板金加工部品を受け持っている。このような工場進出の結果、農山村部では専業、第1種兼業が減少、第2種兼業が増加、戦後増加を続けてきていた1～2ha規模農家が減少に転じた。村落社会の構造も進出工場の規則的就業と近代的な職階制がムラの伝統的秩序に大きなインパクトを与えたが、なお社会的な単位としてのムラは根強く生きていることが確認される。

コ メ ン ト

以上のような五つの報告に対し、オーガナイザーが依頼した青野寿彦(中央大)、森川 滋(大阪経済大)、吉田隆彦(福井大)、長岡 顕(明治大)、竹内淳彦(日本工業大)の各氏が次のコメントを加えた。

青野寿彦(北村報告についてコメント)：①農村工業の類型化には生産手段と労働力の使われ方を指標とする方法も有効ではないか。②地域経済との関連からすれば地場産業の組織のされ方に注目すべきではないか。③農村の工業化にあたって地域の産業構造との関係がより考慮されるべき。地場産業の育成が産業構造のモノカルチャー化をもたらしのは好ましいものではなく、進出工場による産業構造の多様化の側面を積極的に評価してもよいのではないか。

これに対し、北村は①の類型化については方法論的には賛意を表わしつつも、現実の問題としてはなお今後の課題とし、③については農業と地場産業を含め諸工業の組み合わせを問題としているのでモノカルチャー化は当たらないと補足した。

森川 滋(青柳報告についてコメント)：①青柳が「成功」と評価する漬物研究会は生業的成功にとどまるのではないか。むしろ生業的形態を成功させる地域の雇用構造こそ問題とすべきではないか。②規模の拡大が研究会の課題とした場合、その存立条件を、競争力、市場、農業側の条件等について検討すべきではないか。

これに対し、青柳はとくに②について野菜栽培組合で原料供給に取り組む等、地域農業全体としての

サポートにより大規模化に対応できる旨回答した。

吉田隆彦(日下部報告についてコメント)：①水車に代表される技術の蓄積が農村の工業化としてあるべき姿を示唆しているのではないか。②土着の工業が地域をまとめる力をもつのではないか。

これに対し、日下部は産地の自立性こそ地域をまとめる力である旨補足説明した。

長岡 顕(松田報告についてコメント)：①資料によれば出稼ぎは70~100aの中農層が農家として存続するための手段になっているように読みとれる。

②村落内部における階層構成と労働市場における階層性との整合関係の検討が必要。③出稼ぎの「位置づけ」は農民側、雇用側、行政側それぞれにおいて異なっている。

これに対し、松田はこれらの指摘のうち①については同意し、②については今後の課題とした。

竹内淳彦(村上報告についてコメント)：①農山村への工場進出については国民経済レベル、地域レベルのおのおのについて位置づけることが必要。前者については比較研究、後者においては核心地域からの距離の違いによる問題が重要である。②平地農村と山間農村の違い、産業間における労働力収奪をめぐる競合、企業サイドの利潤論理と地元の福祉志向との乖離等が問題とされるべき。③全報告を通じて土地利用の競合についての関心が欠如していた。

これに対し、村上は①について農村との関係での工業のインパクトの考察には必ずしも全国的スケールの視点は必要ではないこと、②のうちの平地農村と山間農村との違いについては、特に都市との関係が問題であり、後者における通勤兼業の困難性について補足した。産業間競争に関しては地方自治体の進出工場に対する労働力斡旋基準が工場規模の拡大とともに形骸化したことを紹介、土地利用競合については事例地域の場合、問題とするに足らないと回答した。

総 合 討 論

討論はおもに1.問題とする地域の範囲、2.農民層分解と工業との関係、3.農村の工業化と村落構造との関係、4.農村工業に関わる評価基準の問題、5.農村に対する工業の影響等をめぐって展開した。

1：まず太田 勇(東洋大)から報告者・コメンテーターに対し、「問題としている地域の大きさ、例えば『地域をまとめる』という場合、どのようなスケ

ールの地域を想定しているかを明らかにされたい」との要求があり、また「いかなる種類の、どの程度の工業が、どのような場所に入った時、どういった性質の問題が生起するのか」が質問された。これに対し日下部は「地域をまとめる」に当たって、「織物そのものおよびその関連産業、そしてそれらを組織する問屋の存在する足利の町をイメージした」との説明を行ない、村上是対象地域の範囲について「労働力の出入りが困難な空間として、盆地の村を選択した」と回答した。

2：入江敏夫(東京経済大)は竹内淳彦のコメントに関連して、農民層分解と工業との関係を問題にし、「工業を受け入れる前の農民層の分解のあり方が、受け入れの論理を規定しているのではないか」との見解を述べた。竹内は基本的にはこの見解に同意しながら「受け入れ側の農村が利潤計算を基礎におく工場に対して誤った認識(幻想)を持つところに問題がある」と指摘した。さらに入江は「戦前型の指導層と戦後型の指導層の交替、それと戦後の農民層分解との関係についてどう考えるか」という、戦後の日本農村を考える上での大きな、かつ本質的な問題提起を行なったが、山口貞雄(文教大)より「議論が無秩序に展開しすぎる」との意見が出され、十分に討議されないままに終わった。

3：森滝健一郎(岡山大)は工業が入ってきた際の村落構造の変化を問題にし、村上の「ムラは生きている」との報告に対し、その意味内容の説明を求めた。これに対し村上は「産業的な面ではかなり変貌しているが、葬儀、講に代表される社会的な面では旧来の共同体的性格が残っている」と回答した。森滝は「直接生産に関わりがない部分ではムラ社会が生きているという意味であろうが、それは今後も生き続けるといえるか」と重ねて疑問を投げかけ、さらに「村落と進出工場がいかなる関係をもつのか、行政がその関係をいかなる方向に誘導しようとしているのか」との新たな問題を提出した。このような村落構造と進出工場との関係については大貫 俊(法政大)が「住民の流動性のあるところとないところでは地域社会の内容が異なる」とし、田村正夫(城西大)も「ハードな面で変化がみられても、ソフトな面では変化がみられないことが多い」ことを具体的な事例をあげて補足説明した。

4：高野史男(筑波大)は「農村にとって好ましい工業とは何か」、「農村工業にとって成功とはいかなる

ことか」を問題とする。これについては竹内が「好ましいとか成功とかいった評価は、工業の立地する地域のヴィジョンと関わる問題であり、いちがいいは決め難い」ことを論じた。また長岡は青柳の農村工業の概念規定に触れ、「それは農村工業の原初的な形態であって、現実の農村工業は青柳の概念では捉えられない」ことを指摘した。また北村の示した農村工場の類型については井出策夫(立正大)が「農村の類型と農村工業の類型との対応関係を考える必要があるのではないか」との提案を行なった。これに対して北村はその点について深く考えていない旨断わった上で、農村工業を「原料を農村に依存し、農業生産と補完的關係に立つ工業」と「原料を農村に依存しなくても、農村に生産基盤を持ち、農村から離れられず、農業生産とも補完的關係に立つ工業」に分類しうることを回答した。以上の諸論議に対して森滝は「地域にとって何が望ましいかといったような価値的視点が背後にあるように思われるが、議論は厳密に行なわれるべき」として「村落構造のある部分が維持されるということが、工業化・行政とどう関わってくるのか」という問題を再提起した。また高野は「価値的な問題を議論する意図はない」として「農村工業が本質的に農村を破壊していく過程について深く追求する必要がある」との問題を提起した。

5: これらを受けて座長より「農村に工業が入った場合、農村にどのような影響を及ぼすのか」に論点を絞ることが要請されたが、入江は高野のいう「農村の破壊」に疑問を投げかけ、「農村破壊といった一般的な次元に議論を戻すのではあまり意味がない」との批判的見解を表明した。しかしながら、松井貞雄(愛知教育大)は座長の提案の線に沿って、村上への質問をも兼ねて「農村に工業が入った場合の影響を考える場合、第2種兼業への移行や脱農は、一時的現象であって、その先にある影響、例えば生産の組織化等を把握する必要がある」ことを三河山間地域を例として補足した。続いて西川 治(東京

大)は「導入された工業のアフターケアをどうするのか」、「農村と工業のあり方から、特に大都市からの距離を含みこんだ農村類型を考えることはできないか」、「工業の効果を1次的、2次的、3次的といった形に分けて検討することはできないか」等、討論の深化の方向づけに関連したいくつかの見解が述べられた。これらに対しては太田が「大きい話と細かい話が結びつかない。その理由は背後にある価値観が明らかにされていないためである。さらに、効果があったというのはどの範囲のことなのか」といった疑問が出された。この価値観の研究への関与について、竹内は「政策を考える際に問題とすればよい」との見解を明らかにし、さらに青野は具体的に「経済的な面に限っていえば、安定的な就業機会を与えるものであれば好ましいと評価できる。地場産業だからといって安定的な雇用機会を与えるとは限らず、その意味からも地域の産業構造を問題とする必要がある」と論じた。青野見解についてはさらに田村が「安定・不安定(雇用の)ということについては時間の問題が関与する」とのコメントを加えた。この政策については河野通博(関西大)が「地元側がいかなる組織によって対応するかが重要」とあり、関連して森滝が「工業と農村の間を調整する主体として、村落・自治体・農協などがいかなる役割を果たすか」がポイントであることを指摘した。かなりのすれちがいはあったものの、この5の段階に至ってはじめて比較的議論が深まったといえよう。

最後に大貫・井出両氏より、このシンポジウムを総括して全体的印象が述べられた。大貫はオーガナイザーの問題提起と報告者の発表内容とのずれを指摘し、さらに工業の論理と農業の論理は異なり、工業が農村に入っていく場合その配置が問題となることを論じた。また工業化政策にも触れ、農家労働のアフターケアの必要性を訴えた。井出は「農業側からの視点が欠けていたのが残念」と簡潔に全体をしめくくった。(伊藤喜栄 記、なお名古屋大学・院の日野正輝・岡橋秀典両氏の協力をいただいた)

RURAL SETTLEMENT AND MANUFACTURING INDUSTRY

Organizers : K. MURATA*, T. UKITA, K. ITO*** and Y. NAKATO******

In this symposium, we intended to clarify the following five problems.

1. The patterns of industrialization in rural areas and their regional variations.
2. The relations between the regional characteristics of rural industries and their markets or circulating systems.
3. The influences of industrialization on agriculture in rural industrial areas.
4. The influences of industrialization on social relations in rural communities of industrial areas.
5. The history of the industrialization policies in rural areas, and the role of these policies to the modernization of the rural communities.

Concerning these problems, five reports were given.

- ① KITAMURA, Y. (Tōyō Univ.) : The distributions and the classifications of rural manufacturing industries in Japan.
- ② AOYAGI, K. (Tōhoku Univ.) : The pickled vegetables industry in Yokote basin in the Tōhoku region.
- ③ KUSAKABE, T. (Ashikaga High School) : The relationship between farming and subcontract textile works operated by farmers—the case study of the Ashikaga textile (for domestic use) manufacturing area—.
- ④ MATUDA, M. (Odawara Jōnai High School) : The role of seasonal workers from rural areas during winter, and the supplying systems of those workers—the case study in Matsushiro-machi, Niigata prefecture—.
- ⑤ MURAKAMI, M. (Hiroshima Univ.) : The changing characteristics of rural communities where manufacturing factories were newly located—the case study of the rural settlements in the Chugoku highland region.

We had the free discussion about those reports and comments. (MURATA, K. and UKITA, T. chaired) The following points were main issues.

- ① Justification of the stud areas.
- ② Relationships between the disintegration of farmers and the manufacturing industries.
- ③ Relationships between the industrialization in rural settlements and the social relations in rural communities.
- ④ Criteria used as measures of the effect of industrialization in rural areas.
- ⑤ Influences of the manufacturing industries on rural settlements.

Nevertheless, we could not hold the symposium successfully. One reason was the discrepancy between the contents of the reports and what the organizers intended in this symposium. And another was the lack of studies from the side of farming and farmers.